岡山県立短期大学紀要　35巻　1～7頁（1991）

漱石作品における女性像（三）

柴田奈美

はじめに

前稿の藤尾・美禰子系列の「陽の女」が、男性主人公の自由にならない、自我の強い女性であったのに対して、本稿で述べる三千代・御米（およね）・静・清子系列の「陽の女」は、男性主人公の心の安らぎの場となっている。

本稿では、この三千代・御米系列の女性の共通点を考察するとともに、前稿で述べた藤尾・美禰子系列の「陽の女」と比較することによって、漱石の女性観の一部を明らかにしたい。

一、『それから』の三千代

母と兄に死別。北海道の父と夫の平岡ばかりを頼りにしている。女学校出。

「彼（代助）は病気に冒された三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思つた。彼は小供を亡くした三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思つた。彼は夫の愛を失ひつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思つた。彼は生活難に苦しみつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思つた」（第十三章）とある通り、死に至る虞れのある病気に冒され、生まれた子どもは直に死んでしまったという、「離れ難い黒い影を引き摺つて歩いてゐる女」（第十章）である。そして、代助と再会後、夫をうらぎって代助の元へ行こうとする。

代助の元へ行こうと決心する時は、「仕様がない。覚悟を極めませう」（第十四章）「（変化の）ある事は承知してゐます。何んな変化があつたつて構やしません。私は此間から、――此間から私は、若もの事があれば、死ぬ積で覚悟を極めてゐるんですもの」（第十六章）と、死ぬ覚悟をもって、理屈抜きで代助について行こうとする。

そして、決心すると、「前後を取り囲む黒い雲が、今にも迫つて来はしまいかと云ふ心配は、陰ではいざ知らず、代助の前には影さへ見せなかつた」「代助は三千代が己を挙げて自分に信頼してゐる事を知つた」「信用してゐなくちや、斯うして居られないぢやありませんか」「希望なんか無いわ。何でも貴方の云ふ通りになるわ」（第十六章）とあるように、代助を信頼しきっている。

一方、代助にとって三千代とは、「三千代に逢つて以後、味はふ事を知つた心の平和」「（三千代と）一時間ばかり話してゐるうちに、代助の頭は次第に穏やかになつた」（第十五章）「その満足を理解して呉れるものは三千代丈であつた」「三千代以外には、父も兄も社会も人間も悉く敵であつた」（第十七章）とあるように、唯一の救いであったことがわかる。

また、「代助は憐れな心持がした」（第十二章）「気の毒に思つた」（第十三章）「愛憐の情と気の毒の念に堪えなかつた」（第十六章）とあるように、憐れな弱い存在として描かれている。

他に、鈴蘭を活けていたコップの水を飲むような詩趣のある点や、「歇私的里の発作に襲はれた様に思ひ切つて泣」（第十六章）く点が挙げられる。

以上をまとめると、次のようになる。

一、子どもを失ったこと。
二、不貞のために、頼りになる者が代助以外にいないこと。
三、病気に冒されていること。
四、代助を信頼しきり、何物も恐れないこと。
五、代助の心の安らぎの場となっていること。
六、女学校出で、詩趣のあること。
七、代助の前で、思いきって泣くこと。

二、『門』の御米

安井の妻であったが、宗助と知り合い、不貞を犯して宗助の妻となる。

「文芸にも哲学にも縁のない」「自分で自分の状態を得意がつて自覚する程の知識を有たなかつた」（第十七章）とあり、教養はないが、「機敏な才覚」（第六章）がある。

不貞を犯し、その罪のために子どもが育たないという、暗い影を引きずっている。その上に、「又頭が重い」（第九章）「あまり健康な月日を送つた経験のない」（第十一章）とあり、病弱な女性である。この「病」が、「血色の可くない御米の、甲斐〳〵しい姿」（第六章）「此まめやかな細君に新らしい感謝の念を抱くと同時に、かう気を張り過ぎる結果が、一度に身体に障る様な騒ぎでも引き起して呉れなければ可いがと心配した」（第十一章）とあるように、夫の御米に対する愛情と深く関わっている。

さらに、不貞を犯して、社会から疎外されている状態のために、夫婦の間には普通以上の信頼と受情が育っていることが、次の引用から指摘できる。「夫婦は」「御互同志を頼りとして暮らしてゐた」（第四章）、「彼等は、日常の必要品を供給する以上の意味に於て、社会の存在を殆んど認めてゐなかつた。彼等に取つて絶対に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼等にはまた充分であつた」（第十四章）、「必竟ずるに、彼等の信仰は、神を得なかつたため、仏に逢はなかつたため、互を目標として働らいた」（第十七章）。

また、「面白くもない二人の顔を御米に見せるのが気の毒なので」（第十二章）「（御米の）可憐な自白」「甚だ気の毒だといふ思が非常に高まつた」（第十三章）「嬉しい様な憐れな様な一種の情緒を以て（御米を）眺めた」「却つて気の毒な心が起つた」（第十七章）という描写があり、弱い立場にある御米に対する夫の愛情が感じられる。

他に、「古家の取り毀たれた今でも、時節が来ると昔の通り（秋海棠が）芽を吹くものと解つた時、御米は、『でも可愛いわね』と喜んだ」（第七章）「夏になるとコスモスを一面に茂らして、夫婦とも毎朝露の深い景色を喜んだ事もあるし、又塀の下へ細い竹を立てゝ、それへ朝顔を絡ませた事もある。其時は起き抜けに、今朝咲いた花の数を勘定し合つて二人が楽にした」（第八章）とあり、詩趣のある女性であることがわかる。

性質は、「真心のある」（第四章）、「御米からは可なり長い手紙がもう二本来た。尤も二本ともに新たに宗助の心を乱す様な心配事は書いてなかつた」（第二十一章）とあるように、細やかな心づかいのできる優しい女性である。

さらに、前項の三千代のように、夫の前で泣く点が挙げられる。「思ひ詰めた調子で、『私にはとても子供の出来る見込はないのよ』と云ひ切つて泣き出した」「ひたすら泣いた」「幼児の亡骸を抱いて、『何うしませう』と啜り泣いた」（第十三章）。

以上をまとめると、次のようになる。

一、子どもを失ったこと。
二、不貞のために、頼りになる者が夫以外にいないこと。
三、病弱であること。
四、夫を信頼していること。
五、真心があり、夫の安らぎの場となつていること。
六、教養はないが、才覚があり、詩趣のあること。
七、夫の前で泣くこと。

三、『こころ』の静

「先生」の妻。

分類では、三千代・御米の系列に入れたが、性質には、藤尾・美禰子等のもつ要素がある。

「先生」と結婚する前の、男性を弄ぶ挙動では、次のような表現がある。「あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、『はい』と返事をする丈で、容易に腰を上げない事さへありました。それでゐて御嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私には能くそれが解つてゐました。能く解るやうに振舞つて見せる痕迹さへ明らかでした」（「下」第十三章）、「私の嫌な例の笑ひ方をするのです。さうして何処へ行つたか中てゝ見ろと仕舞に云ふのです」（「下」第三十四

章）。

しかし、結婚後は、次に引用するとおり、夫だけを愛し、夫だけに愛される女性として描かれている。「妻の方でも、私を天下にたゞ一人しかない男と思つて呉れてゐます」（「上」第十章）、「奥さん（静）も自分の夫の所へ来る書生だからといふ好意で、私を遇してゐたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばら〳〵になつてゐた。それで始めて知り合ひになつた時の奥さんに就いてはたゞ美くしいといふ外に何の感じも残つてゐない」（「上」第八章）。

夫の苦悩を感じとり、同情を寄せる優しさをもっているが、「妻が私を誤解するのです。それを誤解だと云つて聞かせても承知しないのです」（「上」第九章）、「女の胸にはすぐ夫（夫の苦悩）が映ります。映るけれども、理由は解らないのです」（「下」第五十二章）、「腹の底では、世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間すら、自分を理解してゐないのかと思ふと、悲しかつたのです」（「下」第五十三章）とあり、夫を心からは理解できていない。

しかし、「私は御嬢さんの顔を見るたびに、自分が美くしくなるやうな心持がしました。御嬢さんの事を考へると、気高い気分がすぐ自分に乗り移つて来るやうに思ひました」（「下」第十四章）「妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違ないのです」しかし「純白なものに一雫の印気でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大変な苦痛だつた」（「下」第五十二章）とあるので、結婚前後を通して、その存在は「先生」の救いであったと言える。

また、「妻の方でも、私を天下にたゞ一人しかない男と思つて呉れてゐます」（「上」第十章）「先生に忠実」（「上」第十七章）「世の中で自分が最も信頼してゐるたつた一人の人間」（「下」第五十四章）と、夫を信頼し、夫から愛されている。

父母を亡くし、夫しか頼りにする者がいないという境遇については、「考へると女は可哀さうなものですね。私の妻などは私より外に丸で頼りにするものがないんだから」（「上」第十章）とある。また、夫の気持ちが理解できず苦しみ、夫が自殺することを知らないでいることに対しては、「不幸な女」「非常に気の毒な気がします」（「下」第五十四章）「私だけが居なくなつた後の妻を想像して見ると如何にも不憫でした」（「下」第五十五章）とあり、憐れな存在として描かれている。

さらに、「子供は何時迄経つたつて出来つこないよ」「天罰だからさ」（「上」第八章）とあり、「先生」の犯した罪により、子どもができない運命にあることがわかる。静自身は、「私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遺りたい」（「下」第五十六章）という夫の配慮から、暗い過去を知らされていないが、「先生」と結婚したことにより、先生の犯した「罪」を共有していることが指摘できる。

また、「どうも言逆ひらしかつた」「泣いてゐる様でもあつた」（「上」第九章）「ある時は泣いて『貴方は此頃人間が違つた』と云ひました」（「下」第五十三章）「妻は泣きました。私が不断からひねくれた考で彼女を観察してゐるために、そんな事も言ふのだと恨みました」（「下」第五十四章）とあり、夫と言い争う時に「泣く」ことが、指摘できる。

その他、女学校出であり、「私は奥さんの理解力に感心した」「普通の男女の間に横はる思想の不平均といふ考も殆んど起らなかつた（「上」第十八章）「学問以外に稽古してゐる縫針だの琴だの活花だの」（「下」第二十七章）という描写から、頭がよく、教養のあることがわかる。

以上をまとめると、次のようになる。

一、(1) 結婚前は、男の心を弄ぶこと。
　(2) 結婚後は、思いやりはあるが、夫の気持ちを心から理解できていないこと。
二、教養があり、頭のよいこと。
三、子どものないこと。
四、頼りになる者が夫以外にいないこと。
五、夫を信頼していること。
六、夫の救いとなっていること。
七、夫の前で泣くこと。

四　『明暗』の清子

『明暗』の清子も、三千代・御米系列の「陽の女」と考えられるが、未完のため清子の境遇や果たす役割が不明確である。

しかし、次の点は三千代・御米等と一致しているといえよう。

一、津田にとって人妻であること。津田と再会することから、津田との愛が再燃して、不貞を犯してしまう運命が予想される。

二、流産していること。湯治に来ているが、病の重くなることが予想される。

三、教養があること。（清子は）「時々は死なんかお活けになります、それから夜よく手習をしてゐらっしやいます」「本もお読みになるでせう」（第百八十章）。

四、津田にとって安らぎの場であること。「普通の場合に起る手持無沙汰の感じの代りに、却つて一種の気楽さを味はつた彼には何の苦痛も来ずに済んだ」（第百八十四章）、「彼は伸び〳〵した心持で清子の前に坐つてゐた」（第百八十五章）。

五　まとめ

以上の女性たちの性質の大きな共通点は、男性主人公に愛されるとともに、男性主人公の精神的な救いとなっていることである。

しかし、一般的な意味において、理想的な女性として描かれてはいない。彼女たちは、次のような条件を共通して負わされていることが指摘できる。

一、子どもがいないこと。

二、男性主人公以外に頼りにする者がいないこと。

三、男性主人公の前で泣くこと。

四、罪を犯していること。（又は罪を男性と共有していること）

右の四つの条件により、男性主人公から憐れむべき存在として愛情を受けていることは、前に述べた通りである。

まず、子どもを持たないという点で、お直やお住と対照的なので、子どもを持つ女の描写を参考にした上で考察したい。

○　子どもを持つ夫婦の描写

「少女は、馴れ易からざる彼女の母の後を、奇跡の如く追つて歩いた。それを嫂は日本一の誇として、宅中の誰彼に見せびらかした。ことに己の夫に対しては見せびらかすといふ意味を通り越して、寧ろ残酷な敵打をする風にも取れた。兄は思索に遠ざかる事の出来ない読書家として、大抵は書斎裡の人であつたので、いくら腹のうちで此少女を鐘愛しても、鐘愛の報酬たる親しみの程度は甚だ稀薄なものであつた。感情的な兄がそれを物足らず思ふのも無理はなかつた。食卓の上などで夫が色に出る時さへ兄の性質としては偶にはあつた」（『行人』「帰つてから」第三章）。

「彼女は自然の勢ひ健三を一人書斎に遺して置いて、子供丈を相手にした。其子供たちはまた滅多に書斎へ這入らなかつた。たまに這入ると、屹度何か悪戯をして健三に叱られた。彼は子供を叱る癖に、自分の傍へ寄り付かない彼等に対して、やはり一種の物足りない心持を抱いてゐた」（『道草』第九章）。

「日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る気にならなかつた。それでゐて一つ室に塊つてゐる子供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。『女は子供を専領してしまふものだね』」「『だつて左右ぢやないか。女はそれで気に入らない亭主に敵討をする積なんだらう』『馬鹿を仰やい。子どもが私の傍へばかり寄り付くのは、貴夫が構ひ付けて御遣りなさらないからです』『己を構ひ付けなくさせたものは、取も直さず御前だらう』」（『道草』第八十三章）。

「『貴夫が私のものでなくつても、此子は私の物よ』彼女の態度から斯うした精神が明らかに読まれた」「彼は我物顔に子供を抱いてゐる細君を、却つて冷やかに眺めた。『訳の分らないものが、いくら束になつたつて仕様がない』」（『道草』第九十三章）。

以上のように、夫婦の間にある子どもは妻の所有物であり、妻と子の世界から夫は疎外される存在のように描かれている。このことは、逆に言えば、仲のよい

夫婦を想定するためには、子どもがないという条件が、漱石には必要であったということになるのではないだろうか。

前々稿の「漱石作品における女性像（一）」において、お住が「陽の女」であると同時に、「病」といふ要素が加わった時のみ、健三の安らぎの場となっていることを述べた。この「病」には、子どもを失った時のノイローゼ状態も含まれる。その部分を次に引用する。

「『妾の赤ん坊は死んぢまつた。妾の死んだ赤ん坊が来たから行かなくつちやならない。そら其所にゐるぢやありませんか。桔槔の中に。妾一寸行つて見て来るから放して下さい』流産してから間もない彼女は、抱き竦めにかゝる健三の手を振り払つて、斯う云ひながら起き上がらうとしたのである」「細君の発作は健三に取つて大いなる不安であつた。然し大抵の場合には其不安の上に、より大いなる慈愛の雲が靉靆いてゐた。彼は心配よりも可哀想になつた。弱い憐れなものゝ前に頭を下げて、出来得る限り機嫌を取つた。細君は嬉しさうな顔をした」（『道草』第七十八章）。

このように、子どもがある場合は、子どもを独占してしまう女として描かれ、ない場合や亡くした場合は、前に述べたように、憐れむべき存在として描かれており、この時には男性主人公の心が女性に歩み寄っていることが指摘できる。

次に、男性主人公以外に頼りにするものがないこと、という条件について考察するが、ここでは、逆に、夫以外に頼りにするものがいる場合はどうなのかを確かめておきたい。

○　夫以外に頼りにする者がいる妻の場合の夫婦の描写

「二人の間柄が擦れ〳〵になると、細君の心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家の方でも同情の結果、冥々の裡に細君の肩を持たなければならなくなつた。然し細君の肩を持つといふ事は、或場合に於て、健三を敵とするといふ意味に外ならなかつた。二人は益離れる丈であつた」（『道草』第七十八章）。

「無論彼女の眼には自分の父の方が（夫より）正しい男の代表者の如くに見えた」「自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、動もすると心の中で夫に反抗した」（『同』第八十四章）。

これ等の引用部分から、夫以外に頼りにする者（この場合は生家または父親）のあることが、夫婦の不仲の大きな原因となっていることがわかる。

また、漱石の「断片」には次のようにある。

「○親ノ威光ヲ借リル細君。御大名ノ威光ヲ借リル細君。下女ヤゴロツキ書生ノ補ヲカリル細君。ナカウドノ威光ヲカリル細君」「他人の力ヲ借リテ夫ニ対スル細君ハ細君ニアラズ他人ナリ。只名前丈ノ細君デアル。二十世紀デハ妻スラ他人ナリ。況ンヤ他人ヲヤ。親愛トカ交情トカ云フ者ノ存在スベキ理由ナシ」（明治三十八年十一月より明治三十九年夏頃まで）。

「威光ヲ借リル」とは「頼りにする」という意味であり、他人の力を頼りにして夫に対する妻は「他人」であるとしている。

旧思想では、妻とは夫に従属するものであったが、「二十世紀」では、妻が夫から精神的に独立してしまっている。その独立の原因を、他人の力を頼りにする妻の精神と漱石は考えていたようである。

このことから、漱石が夫婦の完全な信頼関係を描くためには、妻にとって夫は絶対的な存在でなければならなかったことがわかる。

したがって、三千代・御米系列の「陽の女」の「男性主人公以外に頼りにするものがない」という条件が必要であったのである。

次に、同様にして、「男性主人公の前で泣くこと」という条件について考察したい。

お直やお住は、精神の激しさに関わらず、落付のある貴女として描かれた。しかし、それは、男性主人公にとっては「図々しいもの」（『行人』「塵労」第六章）と感じさせる態度であった。その部分を、次に引用する。

「或刹那には彼女は忍耐の権化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない気高さが潜んでゐる。彼女は眉をひそめる代りに

微笑した。泣き伏す代りに端然と坐つた。恰も其坐つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた」（『行人』「塵労」第六章）。

「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張り逆らはない。僕が打てば打つほど向はレデーらしくなる。そのために僕は益無頼漢扱ひにされなくては済まなくなる。僕は自分の人格の堕落を証明するために、怒を小羊の上に洩らすと同じ事だ。夫の怒を利用して、自分の優越に誇らうとする相手は残酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遥に残酷なものだよ。僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思ふ。抵抗しないでも好いから、何故一言でも云ひ争つて呉れなかつたと思ふ」（『行人』「塵労」第三十七章）。

「時によると、不快さうに寝てゐる彼女の体たらくが癪に障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つた盡、わざと慳貪に要らざる用を命じて見たりした。細君も動かなかつた。大きな腹を畳へ着けたなり打つとも蹴るとも勝手にしろといふ態度をとつた。平生からあまり口数を利かない彼女は益沈黙を守つて、それが夫の気を焦立たせるのを目の前に見ながら澄ましてゐた。『詰りしぶといのだ』健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色ででもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はなければならなかつた。しぶといといふ観念丈があらゆる注意の焦点になつて来た。彼は余所を真闇にして置いて、出来る丈強烈な憎悪の光を此四字の上に投げ懸けた。細君は又魚か蛇のやうに黙つて其憎悪を受取つた。従つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても気違染みた癇癪持として評価させなければならなかつた」（『道草』第五十四章）。

「二人の関係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ帰れと云つた。細君の方ではまた帰らうが帰るまいが此方の勝手だといふ顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰り返して憚らなかつた。『ぢや当分子供を伴れて宅へ行つてゐませう』細君は斯う云つて一旦里へ帰つた事もあつた」（『道草』第五十五章）。

これらの女性に対して、三千代・御米・静は「泣く女」として描かれている。

「（三千代は）瞼の赤くなつた眼を突然代助の上に睜つて、『打ち明けて下さらなくつても可いから、何故』と云ひ掛けて、一寸躊躇したが、思ひ切つて、「何故棄てゝ仕舞つたんです」と云ふや否や、又手帛を顔に当てゝ泣いた。『僕が悪い、勘忍して下さい』」（『それから』第十四章）。

「『私にはとても子供の出来る見込はないのよ』と云ひ切つて泣き出した。宗助は此可憐な自白を何う慰さめて可いか分別に余つて当惑してゐたうちにも、御米に対して甚だ気の毒だといふ思が非常に高まつた」（『門』第十三章）。

特に、次に引用する『こころ』の静の場合は、夫との言い争いの場面であり、お直やお住と対照的な好例であろう。

「能く聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆ひらしかつた」「さうして其うちの一人が先生だといふ事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、何うも奥さんらしく感ぜられた。泣いてゐる様でもあつた」（「上」第九章）。

「ある時は泣いて『貴方は此頃人間が違つた』と云ひました」（「下」第五十二章）。

「妻は泣きました。私が不断からひねくれた考で彼女を観察してゐるために、そんな事も云ふのだと恨みました」（「下」第五十四章）。

一方、この静に対する夫の態度は、「妻から何か云はれた為に私が激した例は殆んどなかつた位です」（「下」第五十三章）とあるように、余裕のあることが指摘できる。

以上のことをまとめると、次のようになろう。

○　女性が泣かず、落ち着いていると、男性が激して自分の人格を堕落させなければならない。――　女性の優位。

○　女性が泣いて取り乱すと、男性に憐みの情が起こり激さない。――　男性の優位。

最後に、「罪を犯していること（又は、罪を男性と共有していること）」とい

う条件について説明したい。

前に三つの条件について述べたが、そのうちの二つ、すなわち、

○　子どもがいないこと。

○　夫以外に頼りにする者がいないこと。

は、罪を犯してしまったこと（又は、罪を共有してしまったこと）によって生じた境遇である点に注目したい。

前者の条件は、次に引用するとおり、『門』『こころ』についてあてはまる。

「御米は其時真面目な態度と真面目な心を有つて、易者の前に坐つて、自分が将来子を生むべき、又子を育てるべき運命を天から与へられるだろうかを確めた」「易者は」「『貴方には子供は出来ません』と落ち付き払つて宣告した」「『貴方は人に対して済まない事をした覚がある。其罪が祟つてゐるから、子供は決して育たない』と云ひ切つた」（『門』第十三章）。

「子供は何時迄経つたつて出来つこないよ」「天罰だからさ」（『こころ』「上」第八章）。

このように、罪を犯した罰によって子どもが生まれないという、運命の力によって定められた境遇として描かれていることがわかる。

次に、後者の条件については、次に引用するように、『それから』『門』についてあてはまる。

「社会から逐ひ放たるべき二人の魂は、たゞ二人対ひ合つて、互を穴の明く程眺めてゐた。さうして、凡てに逆って、互を一所に持ち来たした力を互と怖れ戦いた」（『それから』第十四章）。

「彼等が毎日同じ判を同じ胸に押して、長の月日を倦まず渡つて来たのは、彼等が始から一般の社会に興味を失つてゐたためではなかつた。社会の方で彼等を二人限に切り詰めて、其二人に冷かな背を向けた結果に外ならなかつた。外に向つて生長する余地を見出し得なかつた二人は、内に向つて深く延び始めたのである」「要するに彼等は世間に疎い丈それ丈仲の好い夫婦であつたのである」『門』第十四章）。

このように、罪を犯した結果、身内の者も社会も敵となり、周囲から見離されたために、二人だけの世界が成立したことがわかる。

つまり、男女が共通の大きな負い目を感じる場合に、前掲の条件が生まれ、その条件によって心の通う仲のよい男女関係が生まれるという設定であったことが指摘できる。

おわりに

三千代・御米系列の女性は、自我の強い藤尾・美禰子系列の女性に比べて、男性に心の安らぎを与える、理想的な女性という面があるが、そうなり得るには条件が必要であったことを本論において明らかにした。

その条件は、次の四点である。

一、子どもがいないこと。

二、男性主人公以外に頼りにする者がいないこと。

三、男性主人公の前で泣くこと。

四、罪を犯していること。（又は、罪を男性と共有していること）

心の通い合う男女を描く場合に、このような条件を設定しなければならなかった点に、生身の女性に対する漱石の懐疑的な構えのあったことが指摘できよう。

平成三年三月　十四日受付
平成三年四月二十六日受理